

26 宣誓文

私たちのグループでは、松田先生の講演のなかで出てきた、「隣人愛」とはどんなことか、という問いに注目し、「隣人愛」という言葉の意味を考えました。さらに、「奉仕」という言葉の持つ意味についても考えながらグループワークをすすめました。

「奉仕」という行為は、無償の愛から見返りを求めずに行う行為であるとされていますが、看護師はお金をもらいそれを行う立場になるので本来の意味での奉仕とは異なるのではないかと意見が出ました。しかし、だからこそ看護師は、看護業務の中で細やかなこと、例えば清拭中冷たいタオルではなく、温かいタオルで気持ちよく拭くなど、患者さんにどうしてほしいか、どうされたらうれしいかを考え、患者さんに寄り添った援助をすることに看護の意義があるのではないかと結論に至りました。そして、「他者を愛し、他者に奉仕していく」ということは、相手を知ろうとする気持ちや相手を受け止める気持ちが重要であり、まず相手に関心を持つことから始まるのではないかと考えました。その先に、その人を知り、愛することが出来る「隣人愛」があるのではないのでしょうか。

看護場面に置き換えて考えた時、「相手に関心を持つ」ことが、すぐに「援助」につながるわけではありません。学生という立場や慣れない病院という場所で私たちが行う看護援助は、自身に納得のいかない不完全な結果をもたらし、患者さんへの思いやりの差を目の当たりにしてきました。だからこそ、人の役に立てる無償の「奉仕」をするには、自分の中の看護技術への確固たる自信が不可欠であり、その自信をもとに患者さんへの看護援助を日々重ねていくことが相手を知ることに繋がるという結論に達しました。「看護に携わる者の奉仕」とは、対象に関心を持つこと、対象の立場になって考えること、看護援助を繰り返し行うこと、この繰り返しなのではないかと考えました。そして、この一連の行為は、「隣人を愛せよ」の言葉の意味にも通じていると思います。

実習で経験したことを振り返るなかで、「私たちは、患者さんの隣人になれたのだろうか」という問いが出ました。グループワークの一週間前に、私たちは生活援助実習に行き、一週間という短い時間でしたが、受け持たせていただいた患者さんの生活上のニーズを知り、看護援助を自ら実施することで、患者さんを理解しようとしていました。いま振り返ると、私たちは、その一連の行為を通して、患者さんにとっての隣人になろうとしていたのではないかと思います。1週間という実習期間のなかでは、患者さんが入院されてから退院していくまでを見届けることはなかなかできません。さらに、看護計画をきちんとやりきることさえ、全員が出来ることではありません。グループワークのなかでは、様々な意見が出

ました。「実習中では、患者さんに入院から退院まで付き合うことはもちろんできないし、自分がやろうと思っていた看護援助が時間的に状況的にやりきれないことがある。だから、患者さんを途中で放り出す形で学校に帰ってくることになる。それは、本当の意味で患者さんの隣人になれたとは言えないのではないか」、「少しでもその患者さんのために何かをして、ありがとうって言ってもらえただけで隣人になったんじゃないか」、「隣人になったという事実より、隣人に「なろう」とするその気持ちが大切なんじゃないか」明確な答えは出ませんでした。互いの価値観を知り、実習での経験を交え、皆で話し合ったことは、大学生活の中で一番充実したディスカッションとなり、今後の実習への心構えをより強固なものとなりました。

最後に、これらの学びから、私たちが今後の実習にどのように活かしていくか、その姿勢と態度について、発表をしたいと思います。私たちは「看護」の役割について、実習を通して多くの学びを得ました。とくに印象的だったのは、モニターが常に付いている患者さんでも、看護師はベッドサイドに足を運び、バイタルを測定し、声や表情から患者さんの状態を見ており、「看護師が観察すること」の大切さでした。私たちは、人と人との関わりだからこそ伝わる思いや温かみのある看護、つまり、機械が人にする行為ではなく、人にしかできない看護をしていけるようになりたいと思います。そして、私たちにしかできない看護を実践するために、患者さんに関心をもち、相手が何を求めているのかをキャッチする力を身につけます。看護学生として、相手のことを思い、尽力していき、相手の心に残る援助をして行きたいと思います。